

八潮新校準備委員会（第2回） 議事録

- 1 日 時 令和5年6月7日（水） 午後3時開会
午後4時45分終了
- 2 会 場 県立八潮南高等学校大会議室
- 3 出席委員 依田委員長、町田副委員長、白井副委員長、菊池委員、猪原委員、栗田委員、砂賀委員、鈴木委員、山崎委員、北島委員、福良委員、廣川委員
- 4 事務局 魅力ある高校づくり課 栗藤、中島、坂本、高辻、橋本

5 協 議 「八潮新校基本計画骨子（案）」について

依田委員長 昨年度実施した第1回の委員会では、両校において作成いただいた新校基本計画検討案に対して、御意見を伺いました。その詳細については、第1回の新校準備委員会議事録のとおりです。その後、事務局において、前回の委員会及び学校職員等で構成される新校基本計画検討委員会でいただいた御意見等を踏まえその内容を検討するとともに、新校の学科名や学級規模についても検討し、まとめた骨子案が「資料1」です。今回は皆さんに骨子案について御意見をいただければと思います。それでは、「資料1 八潮新校基本計画骨子（案）」の説明を事務局からお願いします。

事務局 （八潮新校基本計画骨子（案）のうち課程・学科等、学校規模について説明）

北島委員 ビジネス探究科の学びは具体的にどういった内容になるのでしょうか。何か例があれば教えてください。

事務局 具体的な教育課程の検討はもう少し先になりますが、大学科としては商業科となるので基本的には商業科の学びになります。実施方策でもうたっている、実践型のビジネス教育の観点から言いますと、例えば課題研究の授業の中で企業と連携し商品開発を行うなど従来の商業科の学びも含まれます。他にデータサイエンスやマーケティングなどもあります。例えば気温とアイスクリームの売れ行きに相関関係があることはよく言われますが、そういった市場調査、市場理論について生徒が実際にフィールドワークするなどいわゆる探究的な学習を取り入れたいと考えています。これまでの八潮南高校の伝統を引き継ぎつつも、新しい角度からビジネスに特化した学びができれば良いと考えています。

北島委員 もう一点。伝統を引き継ぎつつも新しい学びをとという説明がありましたが、その新しい学びにはある程度目途が立っているという理解でよろしいでしょうか。

事務局 目途というとなかなか難しいところはありますが、そこを目指して検討を進

めているところであります。現在ある商業科の科目で対応するのか新しい学校設定科目を置くのかなど科目をどう設定していくかも含め、検討しています。

北島委員 とても楽しみです。

菊池委員 ビジネス探究科という学科名の学校は県内に他にもあるのでしょうか。

事務局 埼玉県内の公立高校にビジネス探究科という学科を設置している学校はございません。私立については全て調査が済んでいるわけではないですが、恐らくはないはずですので、県内初だと思います。ただし、全国的に見ると、〇〇探究科のように学科名に探究が付く学校は増えております。第2期実施方策における他の新校でも学科名の原案を〇〇探究科としている学校もあります。いずれも八潮新校同様に検討段階なので最終的にどうなるか分かりませんが、我々としてはやはり学習指導要領を踏まえ、ビジネス探究科を原案として提案しています。また、参考までに、本委員会に先立って行われた学校教職員や局の職員で構成された第2回八潮新校基本計画検討委員会では、探究という言葉に普遍性はあるのだろうかという心配の声がありました。現在の学習指導要領では探究は中心的な位置づけですが、10年後、20年後も今と同じ響きを保っているのだろうかという慎重な意見です。

菊池委員 1学年240人で6クラス規模というのが原案ですが、現在の八潮南高校と八潮高校のクラス数を合わせた数を教えていただけますでしょうか。

事務局 6クラスは現在の八潮南高校と同じ数です。八潮高校は現在4クラス規模ですので、2校を単純に合わせると10クラス規模になりますが、既存の施設を活用することをベースに新校のクラス数を検討していますので6クラスを原案としています。また、先ほども説明しましたが地域の中学生の進学希望状況や近隣の公立高校の生徒収容状況等も踏まえ、総合的に勘案して全体6クラス規模で、普通科3クラス、ビジネス探究科3クラスという内訳にしています。基本的には倍率が1.0倍を切らないような適正な規模感が必要かと考えています。

町田副委員長 6クラス規模という原案について、現在八潮南高校は6クラスなので、本校の施設を活用するという点では6クラスが適正かと考えています。現在、選択授業などに対応できる教室に多少の余裕はあるにはありますが、HR教室としての活用を考えると、やはり6クラスかと思えます。普通科とビジネス探究科という原案について、普通科は中学生にも分かりやすくこれで良いと思えますが、中学生が専門学科を選ぶときにはどうしても、どんな学科なのかという不安がつきまいます。結果としてなかなか選びきれないという実態があるかと思えます。ビジネスに関する学科については、中学生や保護者にとって分かりやすい学科名が良いのではないかと思います。

白井副委員長 2校の統合という観点からすると、普通科4クラス、ビジネス探究科2クラスというのもありかとは思いますが、ビジネス探究科を3クラスとすることで学科内の選択科目を増やすことができます。普通科についても現在の八潮高校は体育コースが1クラスあるので実質は3クラスであることも踏まえると、原案は妥当かと考えております。学科名については、その時代、時代で求められる生徒像に合わせてふさわしい学科名にしていく必要があると思っています。ビジネス探究科

は県内初との説明がありました。他県の例を調べると、静岡県富士市立高等学校に商業系のビジネス探究科があります。他にも高知県立山田高等学校や徳島県立徳島商業高等学校でもビジネス探究科があるので、そういった他県の状況も参考になるかと思いました。

砂賀委員 八潮市の中学校の生徒数は、一時期増えていましたが現在はそこからしたら減ってきているのが現状であり、八潮市全体で見ると今後大きく減っていくという状況でもありません。そういった状況なので、できたら普通科をもう少し増やしていただけると八潮で学びたいという子供たちの受皿になると考えています。2校で10クラスだったのが6クラスになってしまうということで、中学校側としてはもう少しクラス数が増えると有り難いと思っています。

依田委員長 クラス数に対する要望ということで事務局として受け止め、6クラス以上にできる余地があるのか学校とも調整いただきたいと思います。最後に全体を通して伺いますので、次に行きたいと思います。それでは事務局の説明をお願いします。

事務局 (八潮新校基本計画骨子(案)のうち基本理念(目指す学校、育てたい生徒像)について説明)

菊池委員 目指す学校イに、ビジネス分野で活躍できる人材を育成する学校とありますが、具体的にこれまでの学びと異なる部分や違う取組はあるのでしょうか。またそれを指導できる教員はいらっしゃるのか教えていただければと思います。

事務局 これまでとの違いという点については、実施方策でもお示しのとおり、株式会社の設立という案を温めてきています。単にビジネスについて学んで、企業に就職して組織の一員となるという道もあるのかもしれませんが、例えば自ら起業してみるということがあっても良いのではないかと、そういった柔軟な発想ができる生徒を育てていきたいという思いがあります。資料のあちこちに、アントレプレナーシップ教育という表現が出てきます。起業家精神と訳されますが、概念としてはもう少し広いものがあります。単に技術的に会社を興す手法だけでなく、心的な態度、マインドも含めて学んでもらいたいと考えています。株式会社の設立は他県に事例があります。生徒が株主になって実際に会社を登記しながらやり方を学んでいる学校もありますが、かなり難易度が高いです。そこまで到達できるか分かりませんが、それに近いビジネスの野心的な学びを実践していくことを考えています。指導できる人材についてですが、新しい学びの実践には教員の資質・能力の向上が欠かせないと思っています。現在、現職のまま現場を離れて1年間大学や研究機関等で学ぶ長期研修制度を活用し、大学の経営学部で教員を派遣しています。その教員が現場に戻ってフィードバックすることで、我々が考える学びの実践につながると考えています。

依田委員長 他の委員の方から意見はございますでしょうか。

北島委員 目指す学校イに、創造的に解決する力や社会人基礎力を養いとありますが、これは一般常識を身に付けるというところもあるのかと思います。それに関連して、育てたい生徒像イに、スポーツや芸術活動にも主体的に取り組むとありますが、ス

スポーツや芸術活動には課外活動や部活動も含まれるのでしょうか。

事務局 課外活動も当然含まれます。課外活動というと部活動を通常イメージするかと思いますが、休日を中心とした地域移行が話題になっており、部活動の在り方が今後変わってくるかもしれません。そのため、広く全般に課外活動ということでスポーツや芸術活動に含まれるものと考えています。目指す学校イにある社会人基礎力は、様々な定義がありますが、八潮南高校で長らく使われてきている言葉でもあります。社会に出たときの対応力や自身のキャリア形成などの意味があるのかと思いますが、そういったところにしっかり取り組ませていきたいと考えています。

依田委員長 他いかがでしょうか。

栗田委員 基本理念は、普通科もビジネス探究科も両方合わせて学校としての基本理念という理解で良いかと思います。学科によって教育課程や学びの内容が異なるものの、ざっくりということでしょうか。そういったときに、ビジネス探究科であればビジネスを探究するための科目を設定していくということでも分かりやすいですが、普通科の場合はこれまでとの違いや魅力ある新校の普通科ですと打ち出していかなければならないと思います。その中で社会人基礎力という言葉を持ってきていますが、社会人基礎力は割と勘違いされやすいです。ここでいう基礎というのは、ベースではなくファンダメンタルです。例えば去年の自分に必要な社会人基礎力と今年の自分に必要な社会人基礎力は異なります。置かれているステージによって変わっていくものなので、常に学び続けなければならないと思います。社会人基礎力を学校全体として使う場合、普通科の特徴を表すキーワードを入れた方が良いのではないかと思います。普通科のポリシーがあり、ビジネス探究科のポリシーがあり、どちらにも係る学校全体としてはこうだというキーワードがあると良いのではないのでしょうか。名案があるわけではないですが。

事務局 どうしても普通科は広く普くというニュアンスが強く、中学生としても特徴がないのが普通科と捉えているところがあると考えています。我々としてもビジネスに関する記載が中心になっていたのかもしれませんが。栗田委員御指摘のように、両学科に共通する項目やフレーズを入れ、更にそれを発展させて学科ごとの学びを分かりやすくまとめていくという表現の仕方が必要なのだと感じました。

栗田委員 もう1点。今年度、八潮南高校の先生を大学で預かっています。私の研究室の隣で私よりも広い部屋で研修しています。その中でいつも議論していることがあります。これまで商業高校は検定試験を一生懸命やってきました。検定試験は達成状況が見えて分かりやすいです。スポーツも勝敗や順位が付くという意味では同じで、分かりやすいことを教えるのはとてもやりやすいと思います。ただ、探究というキーワードをビジネスに入れたということは、なぜ検定試験を受けるのか、試験に合格するまでに自分はどう成長したのかといったように自分自身も探究することになります。検定試験は道具であり武器にはなるが、ただ持っているだけでは社会では通用しないでしょう。ではもう一つの武器は何だろうかとなったときに、それが社会人基礎力ではないのでしょうか。それをやるときにどう工夫したか、教員とどう話し合ったかといった目に見えない学びを商業高校に取り入れていけると

良いのではと話し合っているということをつけ加えておきます。

依田委員長 商業高校における検定試験の在り方、考え方について、町田校長に御考えを伺いたいと思います。

町田副委員長 やはり商業高校では検定試験をメインにやっているところはありません。生徒にとっては武器にもなります。結果が出るというのは生徒のモチベーションにつながり、取り組む姿勢も変わってきます。ただし、プロセスも当然大事なのですが、結果だけを求めているという現状も実際にはあります。ただ合格できれば良いといったように生徒の学びや力の付け方が検定試験に合格するためだけのものになってしまうのは問題であると考えています。企業が評価しているのは、資格を持っていること自体ではなく、資格を取るに至る努力とがんばりであると考えています。

事務局 生徒の資格取得に励む商業高校の実態は我々としても理解しているつもりです。実施方策でパイロット校とうたっているように、今回はそこに、それとは違うアプローチがあるのではないかという期待が込められています。栗田委員から、自分を探究するという言葉がありましたが、そういうことなのだろうと思っています。普通科の生徒も含め、探究的な学びを中心に置いて、専門学科が併置される学校の普通科には、単なる普通科ではない、ビジネス探究科の色がにじみ出るような記載をしていきたいと思っています。

依田委員長 栗田委員よろしいでしょうか。それでは、2ページ目に進み、教科指導について事務局から説明をお願いします。

事務局 (八潮新校基本計画骨子(案)のうち基本姿勢、教科指導について説明)

栗田委員 内容について特に意見はありませんが、是非これはしっかり進めていただきたいと思う項目があります。前回も申し上げたが、教科横断的な学びです。パイロット校として、普通科とビジネス探究科のそれぞれのカリキュラムを横断できる学びを実践して行ってほしいと思います。大学で言うと、経営学部の生徒が薬学部の授業を受けたり薬学部の生徒がマネジメントの授業を受けたりということです。更に地域との連携、協働となったときに、ビジネス探究科の生徒だけがやるのではなく普通科の生徒も地域の方々と議論したり意見を言ったりできるような仕組みにしなければならないと思います。大変なことかと思いますが、そういったカリキュラムの編成を是非お願いしたいと思います。

事務局 まさにそこができればパイロット校であり、我々としてもそこが目指すところです。八潮南高校と八潮高校が既に取り組んでいる地域との協働をベースに、両校の持ち味がブレンドされていくイメージですので、良いカリキュラムができるようにいろいろと御指導をいただきたいと思います。

栗田委員 なぜこういった意見を述べたかと言いますと、文系だけのクラスで教えるのと理系だけのクラスで教えるのでは、学生の反応が全く違うからです。大学までは文系理系と分かれて学びますが、社会に出た瞬間にその分類に関係なく一緒に働くことになります。そしてお互いに変な人と認識します。大学では専門性の高い研究をするため、その変な部分をより育てていくことになっていきます。そんな中

で、今大学では教科横断型の科目を作るといことが進んでいます。理学部も薬学部も経営学部も一緒に授業を受けて一緒に課題解決していきましょうという考え方です。東京学芸大学では大学全体で共通科目を作るといのを今年度からやっています。全14回の講座を半分に分け7回で解決する課題を設定しています。既に様々なところで実践されており、もはや遅いくらいだと感じます。個に応じたとか一人一人といった表現は、武器を磨くという意味でとても重要だと思ひます。是非よろしくお願ひします。

鈴木委員 内容については問題ないと思ひます。ですが、記載されている文言が民間企業の企業理念のレベルと同じくらい難しい表現になっていると感じます。また、中学生がどこまで理解できるのかという疑問が残ります。基本計画としてはこれで良いですが、今後作成していく新校のパンフレット等ではもう少し分かりやすい表現にした方が良く思ひます。ビジネス探究科についてもどんなイメージが持てるのか、どうい中学生が関心を持ってくれるのか、これだけではそこが見えづらるので、もっと分かりやすい表現で示せば良く思ひました。

依田委員長 今の御意見は生徒募集のところでもう一度取り上げたいと思ひます。

白井副委員長 大学進学についてももう少し盛り込んでも良いのではないかと考えています。埼玉県の令和4年3月高校卒業者の進路状況を見ても、大学等進学率が63.4%となっています。具体的な記載内容についてですが、教科指導においては、ビジネス探究科と普通科の併置の強み、相乗効果を生かして学校全体で探究活動をやっていくというニュアンスがあっても良いのではないかと思ひます。そうすれば大学入試の総合型選抜にも対応できるのではないのでしょうか。普通科については文部科学省が特色ある学科の設置を提唱しており、その中でも学際・科学的な領域に重点的に取り組む学科の特色を新校の普通科に取り入れていけると良いのではないかと考えています。具体的には具現化イに、ビッグデータの分析、活用とありますが、その手前にある分析の手法として、データサイエンス技術に置き換えてはいかがでしょうか。他県にはデータサイエンス学科もあり、普通科の特色化につながると考えています。また、具現化ウの冒頭に、例えば、生徒の理解度に応じた補助教材の導入、また、オンライン学習教材を活用するなど（生徒一人一人の理解度を把握し）ながら生徒の課題を支援しを入れてはどうかと考へました。

事務局 （八潮新校基本計画骨子（案）のうち生徒指導について説明）

依田委員長 横文字が多い印象ですが、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーという用語について委員の皆様はお分かりでしょうか。

栗田委員 私自身、中学生が何を考へて高校を選ぶのか想像もつきませんが、当時は恐らく何も考へていなかったのだと思ひます。これだけ情報が氾濫する現代においても基本的には変わらないのではないのでしょうか。そういった中で生徒募集をどうするのか。これから考へていくことだと思ひますが、どんな生徒に入学して欲しいのか、そのためにどんな努力をするのかといことが大事だと思ひます。中学生が何を望むかというよりは、入学したらこんなことができる、これだけは自信があるといようなことを言えれば良いのではないのでしょうか。格好良く、アカデミック

なキーワードを入れて呼び水にしないといけないとも思います。また、入学したら全然違ったということも避けなければならないと思います。やたら漫画チックにする必要はありませんが、例えば探究という言葉も少し重い印象かもしれないと感じています。探究を中学生にも分かりやすい表現に変えると、入学したら探究ってこういうことだったのかと実感でき、子供たちにとって良い形になると思います。特にこうするという案はないですけど。

依田委員長 御意見ありがとうございます。生徒募集の御意見でしたので、また後で取り上げていければと思います。ここでは、引き続き生徒指導の御意見をいただければと思います。

北島委員 具現化ウに、教職員一人一人がカウンセリングマインドを身に付けとありますが、小・中学校の先生方が生徒や保護者とのトラブルで病休や退職になってしまうという現状があります。その中で、高校の先生はどのようなところでカウンセリングマインドを身に付けていくのでしょうか。高校生活の中でこの表現に触れたら、個人的には逆に不安になってしまいますので、お考えがあれば伺いたいと思います。

依田委員長 小・中学校の話も出ましたので、砂賀委員から学校におけるカウンセリングの体制について、例えばこんな取組をしている等あれば御紹介いただければと思います。

砂賀委員 小学校も中学校も同じですが、学校における様々な教育活動や人間関係で何かしらの課題が見られる生徒に対して、小さな変化を見逃さず、時には寄り添い、また教員だけでなく相談室も活用しながら生徒が自分の本心を語れるようにするという視点を大切に指導しています。一昔前の生徒指導は厳しいイメージがありますが、今は一人一人を大切にするという観点で取り組んでいると思います。ただし、生徒を大人として送り出すための準備という中学校の使命を踏まえると、善悪の線引きはしっかりしないといけない。今は本当に子供も保護者も価値観が多様化しており、生徒指導は丁寧に、適切にやっていく必要があると考えています。

事務局 カウンセリングマインドについては、教員がそういうマインドをしっかりと持って生徒指導に臨みましょうということであり、カウンセリングの技術というよりは心の持ちようであると考えています。埼玉県には教員研修を行う総合教育センターがあり、そこにカウンセリング関係の研修があります。また、それぞれの経験年数や職務職責に応じた研修もあり、そこにも一部取り入れられています。いかんせんマインドなので、そういう心持ちで生徒と良い関係を築いていきましょうということです。カウンセリングの専門的な部分については、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーといった外部の力が担っていくこととなります。まずは教員一人一人がそういうマインドを持って生徒に接していき、専門的な領域でのケアが必要な場合は専門職との連携を図るということが、ウの趣旨です。

北島委員 個人的には、カウンセリングマインドよりも、生徒に寄り添いなど分かりやすい表現にした方が、温かみがあって良いと感じました。

依田委員長 教職員のカウンセリング能力を向上させる研修は実際にあるのでしょうか。

事務局 教育相談のカテゴリーで、初級・中級・上級に分けて、教員の経験に合わせて学ぶことができます。専門的な研修を積み、学校の中で教育相談の中心的な役割を担う教員もいます。全ての教員がそういうスキルを持つかというところは難しいところもあります。カウンセリングマインドという用語は埼玉県で教員であれば誰でも聞いたことがあり、表現として難しいのではないかと御指摘は鈴木委員からもありましたが、子供たちが分かりやすく読めるかという観点で仕上げられてはいないところもあります。教職員が八潮新校に異動を希望する際の、教員向けの資料にもなり得るため、教育的な専門用語や業界内でしか通用しない表現が使われているという実態があるのかもしれませんが。改めて、教員という狭い世界で作ってきたのだという点に今日は気付かされたので、違う表現にという御意見は貴重な御意見として受け止めたいと思います。今後、反映できるところは反映していきたいと思えます。

依田委員長 進め方が悪く申し訳ありませんが、10～15分程度時間を延長してもよろしいでしょうか。(一同了解)。それでは、4ページ目の進路指導について事務局より説明をお願いします。

事務局 (八潮新校基本計画骨子(案)のうち進路指導について説明)

白井副委員長 基本方針の中に、大学や地域企業等、地域社会と連携・協働した進路指導を実施するという項目が入れられると良いと思えます。

栗田委員 生徒指導にもかかわってくるかと思えますが、教員には得意不得意があると思えます。教育職員という言葉があるように、事務職員も生徒からすれば大人であり、事務職員に生徒指導など生徒と接する仕組みにすることはできないでしょうか。教員も事務職員も一緒になって生徒を育てていくということです。社会人基礎力の観点から言えば、例えば正門で挨拶や声掛けなどを事務職員ができると良いのではないのでしょうか。そうすれば生徒の様子や情報を教員と共有でき、それも学校の魅力になるのではないかと考えます。

依田委員長 校長先生に聞いてみたいと思えますが、よろしいでしょうか。

町田副委員長 現実的には難しいと考えます。事務職員は自身の仕事で手一杯のところがあります。授業料等の関係で生徒が事務室に行くこともあり、全く生徒と接しないということではないと思えます。そういう意味で声を掛けるということもできなくはないですが、朝の挨拶運動に事務職員をというのは、勤務時間の関係もあり難しいのではないかと考えます。

栗田委員 教員だけでなく、事務職員も工夫して生徒と接するような学校になれば、パイロット校にふさわしい新校になるのではないかと考えました。

事務局 例えば掃除の時間に事務室担当の生徒が事務職員と会話をしているのはあり、そこに教育的な効果はあるのだと思えますが、学校は法に縛られているところがあります。学校職員は教育職と行政職に明確に分けられ、学校教育法上では教育をつかさどることができるのは教育職だけです。事務職員の中には、積極的に生徒に挨拶をしたり話をしたりしてくれる職員もいると思えますが、仕組みとしては難しいと考えます。

栗田委員 残念です。

事務局 キャンペーンとしてそういう取組をやったり、校長のマネジメントで近いことはできるかもしれないが、法の壁があるというところでしょうか。

山崎委員 中学生はまだ何も考えていないという意見がありましたが、明確に夢がない中で高校に入学する生徒が多いのかと思います。私自身の経験を踏まえると、高校生活を終えた時点で明確な夢や目標を持って就職をするというのも難しいと思います。卒業間近になって焦っていろいろと夢を探しに行くことになるのですが、時間的には猶予がなく厳しく、今の中高生は夢や希望がない傾向があるのではないのでしょうか。高校生活で夢や目標をしっかりと持つためにも、様々な職業を知るという授業があると良いと思います。子供たちにとってイメージしやすい警察官とかだけでなく、世の中には本当に多くの職業があふれています。職業を知るということは、自分を知るということにつながり、就職してから長続きすると思います。最近ユーチューバーなど起業する人も増えてきているので、起業家精神というキーワードが骨子案に入っていることは非常に良いと思いました。

事務局 夢を持つという観点は非常に大事だと考えています。学校によって様々な取組があると思いますが、御指摘いただいた進路指導が新校でできるよう進めていければと思います。

依田委員長 地域連携にもかかわってくる話かと思えますので、そういったところも進めてもらいたいですね。最後に全体についてご意見を伺いますので、次の生徒募集に行きたいと思えます。

事務局 (八潮新校基本計画骨子(案)のうち生徒募集、その他について説明)

依田委員長 先ほど鈴木委員からあった、中学生に向けた発信という点について、再度事務局から考え方を説明いただきたいと思えます。

事務局 新しい学校を開く際にはその学校の魅力を知ってもらうことが大事であり、生徒募集の項目はどの新校も記載が厚くなっています。この4月に開校した児玉新校と飯能新校については我々もずっと見守り、応援してきたところですが、本当に生徒募集に力を注いできました。飯能高校ではインスタグラムや公式LINEなどのSNSを有効活用し、効果的な広報活動を展開していました。普通科と農業科と工業科がある児玉高校では、HPに360度ビューワを載せ、施設や設備をバーチャルに見てもらえるようにしていました。また、メタバースを活用した仮想空間上の文化祭も実施していました。いろいろな媒体があり戦術としてはたくさんありますが、何を売りにするのか、どうやって分かりやすい言葉にしていくのかという戦略をしっかりと練っていくことが大事であると考えています。基本方針や具現化に記載されていることをもとに、八潮新校の特徴をうまく乗せて上手に発信していき、パンフレットなどの媒体も含めて考えていきます。

依田委員長 栗田委員から先ほど生徒募集について御意見がありましたが、もう一度御発言をお願いします。

栗田委員 皆さんのお話を聞いた上での総括的な意見を述べます。探究がどんなものなのか、中学生に分かりやすく発信していく必要があると考えます。また、地域貢

献や地域連携ということもありますが、地域だけでなくグローバルな視点を持つことも大事。そういった中で面白いキーワードを思いついたので紹介します。地域活動については対面活動が基本で、「行って、見て、聞いて」、グローバル活動については「見て、分かって、知って」というキーワードを使うと、中学生もそうかそんなことができるのかという絵が描けるかなと考えました。更にはこういうことができる教員を支援することも良いと思います。グローバル活動であれば英語の教員や歴史の教員などが挙げられますが。

依田委員長 具体的な取組の話をいただき、今後の参考になるかと思えます。

鈴木委員 生徒指導の具現化案にある、交通ルール、マナーを徹底するについて。新校は八潮南高校の場所に設置されますが、八潮南高校は9割近くが自転車で通学しているかと思えます。PTA活動をやっていた中で感じましたが、この項目はとても大事だし絶対に無くしてはいけないことだと思います。記載はこのままで良いですが、もっと強調するとか極端に言えば一番上のAに持ってきても良いと個人的には思っています。子供の安全が第一ではあるが、交通マナーが生徒ないしは学校の評判につながっていきます。もっと具体的に、もっと厚くしても良いと感じました。

事務局 両校案をもとに最終的に本日お示ししている骨子案の形にしましたが、もとの八潮南高校案は、自転車乗車時のルールやマナーを徹底し、交通事故を減少させ、地域から信頼を得られるような指導を行うとなっております。まさに鈴木委員がおっしゃったことがそのまま学校からの案として出されています。事務局で表現を丸めましたが、気持ちとしては八潮南高校案と同じです。実際にはこの項目が更に落とし込まれて学校の教育活動が固まり、骨子案をもとに両校の教員が更に検討を進めていきますので、両校の良いところを生かしていければと思います。

依田委員長 それでは、全体を通して、何かご意見はございますでしょうか。福良委員、いかがでしょうか。

福良委員 先ほどの交通マナーに関して、義務ではありませんが自転車運転時のヘルメットを被りましょうという風潮になっているかと思えます。新校開校時には更に浸透していくことが予想されるため、そういった観点も具体的に示した方が良いと感じました。地域に根ざしたというところは、他の委員からも御意見がありました。八潮高校とモンテールという洋菓子屋さんが提携して、トマトを練りこんだシュークリームを期間限定で販売していました。統合前の学校でそういった取組をやっていましたので、新校でも引き継いでいくといったところも強調していただくと良いと思いました。地元の方は比較的自営業が多く、そういった方たちを講師に呼んでみるのも、地域に根ざした活動としては良いのではないのでしょうか。地域と密接につながった新校という魅力につながり、地域の人にも応援してくれるのではないかと思います。

事務局 福良委員御指摘のとおり、八潮高校と八潮南高校がこれまで培ってきた地域とのつながりが、新校の探究的な学びにつながると考えています。今実際に両校では探究をやっており、もともとその素地があると思っています。新校でもしっかり引継ぎ、売りにしていきたいと考えています。

猪原委員 この委員会は、新校の理想を語る場だと思えます。皆さんの御意見は大変素晴らしいものと感じました。市内の小・中学校は、八潮高校とも八潮南高校とも様々な連携をさせていただいています。八潮南高校に関しては、市内の中学生が一番多く通っている学校です。引き続き今まで以上に市内の中学校といろいろな連携を図りながら進めていくことが、最終的に新校の倍率につながっていくのではないかと考えています。開校時に倍率が1.0倍を切ると大変だと思えますので、八潮の子供たちの希望となるような連携ができればと思っています。

事務局 エールをいただいたと思っています。感謝します。

菊池委員 市内の2校が統合して新校になるので、単なる統合ではなく、入学してみたい、入学して良かったと思えるような特色を持った学校にさせていただきたいと思えます。また、分かりやすいメッセージ等で積極的にPRしていただき、魅力ある学校にさせていただければと思えます。

依田委員長 それでは協議の方は、以上で終了とさせていただきます。